令和5年度 優秀映画鑑賞推進事業

第22回 市民会館名画劇場

森雅之、石原裕次郎、市川雷蔵、高倉健――
個性豊かな男優たちの
魅力があふれる作品を紹介。

2023年 9/22(金)・23(土・祝)

下関市民会館 大ホール

鑑賞料 全席自由 1日券 500円

浮雲

嵐を呼ぶ男

眠狂四郎殺法帖

網走番外地

上映スケジュール

22日(金) 開場9:30	10:00～12:03 「浮雲」
	13:00～14:31 「網走番外地」
	14:40～16:20 「嵐を呼ぶ男」
23日(土・祝) 開場9:30	10:00～12:03 「浮雲」
	13:00～14:40 「嵐を呼ぶ男」
	14:50～16:11 「眠狂四郎殺法帖」

【注意事項】昼食・飲み物は持参可能
※ただしホール内は飲食禁止のため、大ホールロビーをご利用ください。

チケット発売日 8月1日(火) ※発売初日のみ、窓口販売10：00～、電話予約・オンライン購入13：00～

プレイガイド 下関市民会館、ドリームシップ、下関市民会館オンラインチケット

●主催：公益財団法人下関市文化振興財団、国立映画アーカイブ ●特別協力：文化庁、一般社団法人日本映画製作者連盟、全国興行生活衛生同業組合連合会、東映株式会社、東宝株式会社 ●協力：株式会社オーエムシー
●後援：下関市、下関市教育委員会、下関市文化連合会

◎発熱や体調不良時にはご来場をお控えください。また、マスクの着用は任意となります。混雑時等の状況に応じてご着用ください。

Twitter Instagram 「下関市民会館」「ドリームシップ」公式アカウント更新中!

お問合せ 公益財団法人 下関市文化振興財団 TEL.083-231-6401
ホームページ … https://scpf.jp

上映作品のご紹介

森雅之、石原裕次郎、市川雷蔵、高倉健――個性豊かな男優たちの魅力があふれる作品を紹介。

浮雲

1955年 東宝
白黒／スタンダード／モノラル／123分

[スタッフ]

原作	林芙美子
脚色	水木洋子
監督	成瀬巳喜男
撮影	玉井正夫
照明	石井長四郎
録音	下永尚
音楽	斎藤一郎
美術	中古智

[出演者]

幸田ゆき子	高峰秀子
富岡兼吉	森雅之
おせい	岡田茉莉子
伊庭杉夫	山形勲
兼吉の妻 邦子	中北千枝子
向井清吉	加東大介
屋久島の小母さん	千石規子
仏印の所長	村上冬樹
医者	大川平八郎

[解 説]

戦中から戦後まもなくスランプ状態にあった成瀬監督は、林芙美子原作の『めし』(1951)を映画化して再起のきっかけとした。その後、同原作者の『稲妻』(1952)、『妻』(1953)、『晩菊』(1954)や室生犀星の『あにいもうと』(1953)、川端康成の『山の音』(1954)の映画化に成功し、〈文芸映画〉〈女性映画〉の第一人者と言われるようになった。この作品は、林文学の最晩年の長篇小説を映画化したものであり、戦時中、勤務先の仏印で激しい恋に陥った一組の男女が、戦後の荒廃した日本でその不倫関係断ち切れない様子を描いたものである。あきらめても裏切られても離れられない二人のやるせなさは、なにかにすがりつかずには生きていけない人間の業の深さを描いた成瀬の代表作といえよう。微妙な心の揺れを表現した高峰秀子と森雅之の演技は敬服すべきものがあり、小津安二郎をして「オレにできないシャシンは溝口の『祇園の姉妹』と成瀬の『浮雲』だ」と言わしめた。「キネマ旬報」ベストテン第1位。

嵐を呼ぶ男

1957年 日活
カラー／シネマスコープ／モノラル／100分

[スタッフ]

原作・脚本・監督	井上梅次
脚本	西島大
撮影	岩佐一泉
照明	藤林甲
録音	福島信雅
音楽	大森盛太郎
美術	中村公彦

[出演者]

国分正一	石原裕次郎
福島美弥子	北原三枝
左京徹	金子信雄
島みどり	芦川いづみ
メリー丘	白木マリ
国分英次	青山恭二
国分貞代	小夜福子
チャーリー桜田	笈田敏夫
福島慎介	岡田真澄
持永	安部徹

[解 説]

実兄・石原慎太郎の小説を映画化した『太陽の季節』(1956、古川卓巳監督)でデビューした石原裕次郎は、中平康の『狂った果実』(1956)や田坂具隆の『乳母車』(1956)など、新鋭、ベテラン監督の話題作に出演し、着実にスターの道を歩み始めた。港町を舞台にした『俺は待ってるぜ』(1957、蔵原惟繕監督)では、「ここではないどこか」を求める孤独な青年を、甘い感傷を交えて演じ、自らのイメージをスクリーン上に描き出した。また同名の主題歌もヒットさせ、歌う映画スターとしての出発とした。本作はその裕次郎のイメージを決定的にした記念碑的な作品である。1958年の正月映画として公開され、総配収3億5,600万円(当時の平均入場料62円)を超える大ヒットとなり、1954年に製作を再開した日活にとっても、その後を決定づけた作品である。監督の井上梅次は新東宝からの移籍組だが、裕次郎が指を負傷してドラムを叩くことができず、とっさにマイクを握って歌い始めるというツボを押さえた演出で観客を楽しませ、この一代の大スターの誕生を導き出した。

眠狂四郎殺法帖

1963年 大映(京都)
カラー／シネマスコープ／モノラル(濃淡型カラー)／81分

[スタッフ]

原作	柴田錬三郎
脚本	星川清司
監督	田中徳三
撮影	牧浦地志
照明	中岡源権
録音	奥村雅弘
音楽	小杉太一郎
美術	内藤昭

[出演者]

眠狂四郎	市川雷蔵
千佐	中村玉緒
陳孫	城健三朗(若山富三郎)
金八	小林勝彦
前田宰相	沢村宗之助
銭屋五兵衛	伊達三郎
僧空然	荒木忍

[解 説]

市川雷蔵の代名詞ともなった「眠狂四郎」シリーズの第一作。原作は柴田錬三郎のベストセラー小説。ころびバテレンと武士の娘の間に生まれた混血児という出生の秘密をもち、虚無と孤独の影をひいて生きる剣士・眠狂四郎を、雷蔵が持ち前の端正な魅力を発揮して演じている。加賀前田藩・藩主による密貿易の事実を証する書状が隠された碧玉仏をめぐり、前田家の間者・千佐、藩主に裏切られ処断された銭屋五兵衛、銭屋を助ける陳孫らの暗闘が繰り広げられる。千佐に助けを求められた狂四郎もこの争いに巻き込まれていく。「眠狂四郎」はこれ以前にも1956～58年に鶴田浩二主演で製作されているが、『お嬢吉三』『濡れ髪三度笠』『手討』など数多くの作品で市川雷蔵とコンビを組んだ田中徳三監督が、雷蔵での映画化を熱望し本作が実現した。雷蔵はこの後、三隅研次、池広一夫監督らとともに眠狂四郎像をつくりあげていく。眠狂四郎」シリーズは1969年の『眠狂四郎　悪女狩り』まで12本が作られた。

網走番外地

1965年 東宝(東京)
白黒／シネマスコープ／モノラル／91分

[スタッフ]

原作	伊藤一
脚色・監督	石井輝男
撮影	山沢義一
照明	大野忠三郎
録音	加瀬寿士
音楽	八木正生
美術	藤田博

[出演者]

橘真一	高倉健
権田権三	南原宏治
妻木	丹波哲郎
阿久田	嵐寛寿郎
依田	安部徹
夏目	待田京介
大槻	田中邦衛
真一の義父	沢彰謙
真一の母 秀子	風見章子
真一の妹 美千子	石川エリ子

[解 説]

日本における映画観客数は1958年をピークに下降線をたどってゆき、時代劇映画の人気も徐々に陰りが見えはじめた。1963年、時代劇王国を築いていた東映は、時代劇からやくざ映画への転換を試み、やくざの意地や義侠心を描いたヒット作を次々と生み出して全国の若者たちを熱狂させた。なかでも高倉健は、「日本侠客伝」シリーズや「昭和残侠伝」シリーズをはじめ、数々のヒット・シリーズに主演して時代の寵児となる。本作は1965年から1972年の間に計18作が製作された「網走番外地」シリーズの第1作。極寒の網走刑務所に収監中の橘(高倉)は、妹や病身の母に再会することを夢見ながらまじめに服役しているが、悪辣な囚人仲間にそそのかされて脱獄計画に巻き込まれてしまう。橘の更正を手助けする保護司役の丹波哲郎、「アラカン」の愛称で人気を博した時代劇の大御所・嵐寛寿郎、そして個性的な演技で脇を支える田中邦衛など、魅力的な俳優たちの競演も見所。